



平成23年度 北中物語 第8号

平成23年6月20日発

文責:校長 中村 裕子

校長直通mail yuko-nakamura@staff.gsn.ed.jp



子どもたちの安全にかかわる

「お知らせとお願い」をさせていただきます。

**保存版**

## 登下校は自力で

○登下校は、当然のこととして、「自力登校」が原則です。「自力登校」は、子どもたちの社会性を育てる上で重要な教育活動です。

**緊急時、非常時以外、車での送迎は自粛してください。**

どうしても車での送迎の必要がある場合は、「周辺にいる生徒や他の通行者」の動きを最優先させてください。（これができない保護者もいるのが残念です。子どもはそんな大人の行動を見ているのです）

☆本校では、大多数の生徒が正門から出入りしています。また、教職員の車や来校者の車も正門から出入りしています。加えて、周辺は車の通りが結構多く、危険と隣り合わせの状況です。事故防止という点からも、車での送迎は、自粛くださるようお願いしています。

保護者の皆さまを事故の被害者にも加害者にもしたくないという思いをご理解下さい。

## 緊急時(台風 雷等)の対応

○子どもたちが在校中は、「待機」を原則とします。

※原則とは、「よほどのことがない限り」という意味ととらえてください。

保護者の迎えが確認された場合のみ「保護者と下校」する。

○車での送迎は極めて危険を伴います。迎える場合でも、時間を遅らせた方が賢明かと思えます。他の家の子とも同乗させる場合は必ず保護者間で連絡を取り合ってください。

この場合の迎えは、誘導に従って下さい。

「迎えは最上」とはいえませんが、非常時、学校では責任をもって、安全が確認できるまで、お子さんをおあずかりしますので、あわてて迎えに来る必要はない、というのが基本の考えです。

以上から、①迎えることにあわてない（雷は1時間もすれば遠のく）②634人もの子どもが一緒に生活していますので、自分の家のことだけを考えない についてご理解・ご協力ください。

## 緊急時の連絡



緊急事態の下校時間の変更、臨時休校等

○ 「学校メール配信システム」に登録されたご家庭にはメールにて配信いたします。

登録を希望されないご家庭には、保護者の緊急連絡先に学級担任等が電話にてお知らせいたします。 なお、皆様からの学校への問い合わせには、対応しきれませんのでご承知ください。

☆ 常々、お願いしておりますが、「学校メール配信システム」に未登録のご家庭は、登録していただくようお願い申し上げます。登録希望者は担任まで申し出てください。

# 「子どものため？」

—— 夏を迎える前に考えていただきたいこと ——

私たちが子どもを前にしてよく使う言葉に「子どものため」というのがあります。子どものことを案じて発する言葉として、親としては自然な言葉です。しかしこの「子どものため」と称して親が子どもに対応する内容によっては、実は、「子どものためにならない」と思うことが多々あります。

例えば、「雨の中の登下校はかわいそうだ。子どものために車で送ってやる」「この子は自分の思っていることを口に出しているのが苦手な性格なので、子どもの気持ちを私が伝えるようにしています」「私は小さいときに、家が貧しかったので欲しいものが買ってもらえなかった。子どもにはそんな思いをさせたくない」「うちの子どもだけケータイを持っていないのはかわいそうだから持たせてやる」等々です。この「子どものため」にしていることが、実は、「子どものためにならないこと」が多いことにそろそろ気づいていただきたいのです。(つい最近の上毛新聞に「子どもをダメにするのは簡単だ。子どもの好きなようにさせてやればいい。子どもの好きなようにさせることは『むごい教育』なのだ。という内容の記事が掲載されていました。納得・・・)

私たちが発する「子どものため」という言葉は、言い換えれば、「子どもの将来のため」という発想が基にあるはずのものです。「子どもの将来」とは子どもが社会の一員として「自立して」生活する将来のことです。つまり、「子どものため」とは、子どもが自立して生きていけるための力、昨今言われている「生きる力」をつけてやることそのものだと思います。

先に述べた「子どものため」の項目をこんな視点で見直したらどうでしょうか。子どもの将来のためにも自立のためにも、反って障害となるのではないかと思えてくることが多いような気がします。

多くの動物は、子孫を残すために子育てをします。しかしその子育ては、本能的に子どもの自立を基本にしていることが観察できます。必要以上の保護は、将来の自立する能力を奪い取ってしまうこと、ひいては種の存続を危ぶませるものにつながることを知っているかのようです。ライオンが数匹のわが子を崖から突き落とし、這い上がってくる子だけを育てる話がありますが、そこまではいかないにしても、気持ちの底に改めて止めておきたい教訓ではないでしょうか。

「子どものため」と思ってしまったことが、後々、親にとっての「悩みの種」にならにようにしたいものです。中学生の夏、それぞれの学年で大きな意味を持ちます。「夏を制するものはその後の生活を制する」と、中学校では言われています。たくましく、少々苦しいことがあっても乗り越えさせる、我慢させるなどを鍛えるのに夏は好機です。

